

御城井御城下絵図について

小野 英治

(会員・弥生町上小倉)

佐伯城と城下町を詳細に描いた絵図としては「御城井御城下絵図・元文三年（一七三八）二月改之」が最も精度の高いものとなっているが、この絵図については、昭和四十八年一月発行の『佐伯史談』（八十六号）に「佐伯城絵図解説（一）」として既に発表したものゝ、この時は原図を見ての解説ではなく、本図の古写真と山城部のメモの略図によるものであり、原図の所在は不明とされていた。

ところが、うれしい事に最近、山際の山中道夫氏がこの原図を所蔵されている事を知り過日清田、塩月両先生と訪問して調査させていただく事が出来たので、その概略を報告致します。

この絵図は、約三米四方の大判で、城と城下町、さらにその周辺部が着色されて詳細に描かれているが、方位については誤記されているものゝ、他は驚くほど精度の高いものとなっている。

城についてみれば、山城の櫓、城門、番所塀、二ノ丸御殿の外形、山頂近くをめぐる道の中員、延長、広場に「捨曲輪」の書込み等があり、特に登山道としては、三ノ丸より直進するものと、



全図（元文三年二月）



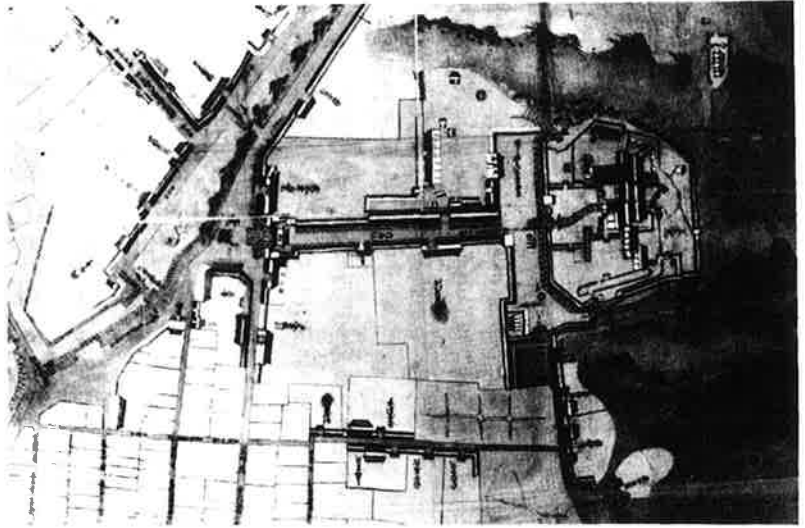
山際谷よりの二本があり、山際谷の道は、現在の三ノ丸より右手の道と一部重複しているが、旧道も草に埋もって確認出来る。三ノ丸より直進する道の中に「水ノ手」らしい池が描かれているが、この所は現在小広場となっている。裏手の雄池、雌池も同様に描かれているところよりして、当時は谷水を利用した水ノ手の設備があったものであろう。

三ノ丸居所は建物群が見取図的によく描かれているが、興味深いのは、右手の城山登山道入口、現在鳥居の建つあたりにあった城門を「黒門」と記している事である。現在三ノ丸櫓門を俗称として「黒門」と呼称しているが、明らかに黒門は別にあつたのである。これがいつしか三ノ丸櫓門と混同されたものであろう。

城下町では、町名、道の中員と延長、重臣宅は氏名や門構えが寺院と共に詳細に記されているのは注目されるが、反面、下土や町人の屋敷割はなされているもの、その名は空白となって省略されている。

城下町全体は巧妙に、土塁と水門で調整する堀（汐入川）と番匠川で囲まれた水城の性格をもち、完全に城と一体となった総構えを形成している事がよく理解出来る。特に重臣邸や、寺院、要所の神社は砦としての機能をもたしている事がよく描かれているようである。

では、このような秘中の秘ともいえる絵図がどうして作成され



沖と大手門附近部分図

たものであるうか、私はこの原典は恐らく徳川三代將軍家光が正保年間（一六四四―一六四八）各藩に命じて提出させた「正保城絵図」ではないかと推測している。

この「正保城絵図」は現在内閣文庫に六十三図残るが、この中には残念ながら佐伯城絵図はない。これは幕末の動乱期に粉失したものであるが、提出された事は確実である。

幕府は諸大名の機密である城をにぎる事により、その威勢を示したのである。この城絵図には、次のような事を書く事が義務づけられていた。

- 一、本二三丸間数書付候事
- 一、殿守書入の事
- 一、惣曲輪狭さ広さの事
- 一、城より地形高き所有者者は高所と城との間の間数書付候事、惣構より外に高所あるとき共に書付候事
- 一、侍町小路割、間数之事
- 一、町屋右同断
- 一、山城平城書様之事

その他種々注意書きがあつたが、この正保図を源流とする本図は、その控図として後に度々内容が取捨選択され改正図となつたものではなからうか。それは「元文三年二月改之」の書入れがその事を物語っているようである。

（おわり）